



Title	鏡と水仙：シェイクスピアのSonnetsにおける隠されたレトリック
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91577
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鏡と水仙—シェイクスピアの *Sonnets* における隠されたレトリック

大森 文子

1. はじめに¹

本稿は昨年度のプロジェクト報告書掲載の筆者の論文（大森 2022）に続けて、シェイクスピアの *Sonnets* のレトリックを考察するものである。大森（2022）では、シェイクスピアによる〈時〉と人との関わりを表す比喩表現を観察し、〈時の翁〉（Father Time）の持ち物とその用途、人間に及ぼす作用を詳細に検討した。本稿では、特に美しい青年への愛を描いた 1 番から 126 番までの詩群を対象にする。〈時〉との関わりの中での詩人の青年に対する認識のしかたと愛情について、人間を〈植物〉として理解するメタファーの観点から考察し、詩に明示されない隠されたレトリックを探る。²

本研究のきっかけとなったのは、言語文化レトリック研究会（本研究科言語文化学専攻内の研究会）第 121 回例会（2022 年 12 月 17 日開催）である。この会で、筆者は大森（2022）に基づき加筆した研究を発表し、当日参加された会員の先生方や院生諸氏からコメントをいただき、大いに刺激を得た。有益なコメントをくださった方々に、この場で感謝申し上げたい。

2. 時の翁と人間

2.1 〈植物〉としての〈人間〉

大森（2022）は西欧文化圏において〈時〉を老人として擬人化した〈時の翁〉（Father Time）の概念について取り上げ、〈時の翁〉がシェイクスピアの *Sonnets* の様々な詩において描出されている様子を観察した。〈時の翁〉とは、（時に前髪を残した）禿げ頭の老人で、通常翼を持ち、大鎌あるいは手鎌、時には砂時計などを携えた姿がルネサンス美術やバロック美術などで描かれている（パノフスキー（2002）および *OED* “time” 34b 参照）。

大場（編注訳、2018、p. 33）には〈時の翁〉を描くシェイクスピアと同時代の 2 つの図版が掲載されている。1590 年頃に Crispin de Passe (the Elder) が描いた図では、両手に大鎌を持った時の翁が翼を広げて空中を飛びながら地上を見下ろし、地上では倒されて息絶えた人間たちが横たわる。1612 年に Otto Cornelisz van Veen が描いた図では、時の翁は背中で翼を広げたまま地上を走り、両手で大鎌を頭上高く振りかざし、その足元には横たわりながら怯えた目で翁を見上げる男性たちや、煉瓦造りの建物の陰でおののく女性たちの姿が見える。鎌は本来、植物を刈るための道具である。ところが、このように時の翁の傍で恐れおののき、あるいは死に絶えた人々の姿からは、〈時の翁〉特有の持ち物（attribute）としての鎌が「人間の命」を刈り取るための道具として機能していることがわかる。〈時の翁〉の側から見れば、人間は植物と異なることなく、鎌で刈り取ってしまえるものなのである。〈鎌〉を携えた〈時の翁〉という文化モデルは、〈人間は植物である〉と捉える概念メタファーを包含するものと言える。

シェイクスピアの *Sonnets* における時と人間の関係を描いた詩の中で、〈人間は植物である〉というメタファー思考そのものが明示されているものがある。以下に引用するソネット 15 番である（以下、本稿での引用の下線部はすべて筆者による）。

- (1) When I consider every thing that grows
Holds in perfection but a little moment;
That this huge stage presenteth nought but shows,
Whereon the stars in secret influence comment;
When I perceive that men as plants increase,
Cheerèd and checked even by the selfsame sky,
Vaunt in their youthful sap, at height decrease,
And wear their brave state out of memory;
Then the conceit of this inconstant stay

¹ 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）。

² 本稿で取り上げた *Sonnets* および *Venus and Adonis* の引用は Burrow ed. (2002) を参照した。

Sets you most rich in youth before my sight,
Where wasteful time debateth with decay
To change your day of youth to sullied night,
And, all in war with Time for love of you,
As he takes from you, I engraft you new. (Sonnet 15)

この詩では 5-8 行目で、人間が植物に等しく (“men as plant”) 成長したり衰えたりする様子が描かれる。9-12 行目では詩人は青春の盛りの青年の姿を思い起こし、横暴な時 (“wasteful time”) ³ が青年の青春の昼を醜い夜に変えようと謀る様子を想像して、13 行目では愛する青年のために〈時〉と全面的に戦争 (“war with Time”) をするのだという姿勢を見せる。

大場（編注訳、2018）は *Sonnets* を二幕構成の劇作品のように解釈して 1 番から 126 番までを Act I とし、「Temps (Time) は *The Sonnets Act I* をとおしての大なる敵役である。」(p. 53) と述べている。*Sonnets* の 1 番から 126 番までのテーマは美しい青年への詩人の愛であると同時に、時との戦いでもあると言える。この「時との戦い」というテーマを最初に打ち出しているのが、Sonnet 1 番の冒頭 4 行である。

(2) From fairest creatures we desire increase,
That thereby beauty's rose might never die,
But as the ripper should by time decease,
His tender heir might bear his memory: (Sonnet 1, ll. 1-4)

この 1 番から 17 番までは青年に結婚を勧める内容で、Marriage Sonnets と呼ばれる (Wilson ed., 1966, p. 89 参照)。引用 (2) では美しい青年を「美の薔薇」 (“beauty's rose”) になぞらえ、美しきものこそ殖えてほしい、薔薇が死に絶えることなく、〈時〉によって老いたものが死んだとしても若い後継ぎがその面影を留めてくれるようにと、青年が結婚して子供を儲けてくれることを願う詩人の思いを表している。美しい青年の命をいつかは奪ってしまう〈時〉に抗おうとする詩人の戦いの姿勢が、薔薇の美の次世代への継承という観点から表現されている。

1 番では青年を「薔薇」に喩えていたが、126 番までを広く見渡すと、15 番に見られたような〈人間〉を〈植物〉の観点からとらえるメタファー思考に基づき、詩人は青年をさまざまな植物に喩えている。青年の喩えとして用いられた植物をまとめると【表 1】のようになる。

【表 1】 *Sonnets* 1 番～126 番における青年の喩えとして用いられた植物

青年	植物		ソネット番号
現在の青年 (若く美しい姿)	花	薔薇 (rose)	1 番、35 番、54 番、67 番、95 番、98 番、99 番、109 番、116 番 (rosy)
		堇 (violet)	12 番、99 番
		百合 (lily)	98 番、99 番
		マヨラナ (marjoram)	99 番 (buds of marjoram)
		花 (flower)	5 番、16 番 (詩人の子の喩えとして)、65 番、68 番、69 番、94 番、98 番、99 番
		蕾 (bud)	(薔薇の蕾) 1 番、35 番、95 番 (budding) (花の蕾) 18 番、70 番
	樹木	木 (trees)	12 番
		樹液 (sap)	5 番、15 番
		葉 (leaves)	5 番、12 番
	植物全般	植物 (plant)	15 番
緑 (green)		63 番、104 番、112 番 (o'er-green)	
穀物	緑 (green)	12 番	
不実な青年	草	雑草 (weed)	69 番、94 番
	果実	イヴの林檎 (Eve's apple)	93 番
	花	腐った百合 (lilies that fester)	94 番
未来の青年 (年老いた姿)	草	雑草 (weed)	2 番
	穀物	芒 (おぎ) (white and bristly beard)	12 番

³ ここでの “wasteful time” の意味について、Duncan-Jones (1997, p. 15) は “time that lays things waste, and is itself wasted” と述べ、大場（編注訳 2018, p. 41）は “wasteful = destructive” との注釈をつけ、“wasteful time” を「暴虐の時」と訳している。

2022 年 12 月 17 日開催の言語文化レトリック研究会第 121 回例会で筆者が発表した際、アンドリュウ・村上スミス准教授よりコメントをいただいた。〈時の翁〉が持つ鎌は、本来、殺傷の道具ではなく農耕の道具である。農耕とは毎年季節が巡る毎に、種を蒔き、育て、実らせ、収穫するという、同じ手順で繰り返される活動である。〈時の翁〉が鎌で人を刈るのは、人の命を奪うというより、四季のサイクルの中で農耕、すなわち命を次につなげる仕事を行なっているのではないか、という示唆である。これは鋭い指摘である。〈時の翁〉の文化モデルにおいて、翁の持ち物が殺傷を主目的とする槍や剣のような武器ではないということが重要で、これは、時の経過の中で死を迎えても次の世代に命がつながっていくという人間の死生観を反映していると考えることができる。「時との戦い」をテーマの一つとする *Sonnets* においても、農耕のイメージを描いた詩がある。

- (3) When I do count the clock that tells the time,
And see the brave day sunk in hideous night;
When I behold the violet past prime,
And sable curls all silvered o'er with white;
When lofty trees I see barren of leaves,
Which erst from heat did canopy the herd,
And summer's green all girded up in sheaves,
Borne on the bier with white and bristly beard:
Then of thy beauty do I question make,
That thou among the wastes of time must go,
Since sweets and beauties do themselves forsake,
And die as fast as they see others grow,
And nothing 'gainst Time's scythe can make defence
Save breed to brave him when he takes thee hence. (Sonnet 12)

この詩も他の *Marriage Sonnets* と同様、〈時〉に抗うために結婚して子 (14 行目 “breed”) ⁴ を儲けることを青年に勧めるものであるが、〈時〉の手から逃れることのできない青年の行く末を連想させるものとして、時を告げる時計の音 (1 行目)、沈む太陽 (2 行目)、盛りを過ぎた葦の花 (3 行目)、白髪に変わる黒い捲き毛 (4 行目)、落葉した高木 (5 行目) に加え、7-8 行目で、収穫され、束ねられて縛られ (“girded up in sheaves”) 白い芒 (のぎ) (“white and bristly beard”) を見せながら荷車に乗せられ運ばれていく (“Borne on the bier”) 農作物が描かれている。7-8 行目については Tyler (1890, p.169) が「収穫祭 (harvest-home) が葬儀へと変質し、実った麦 (corn) を積んだ荷車が死んだ老人を運ぶ棺台になっている」と述べ、ヨブ記 5 章 26 節と対比する。⁵ Duncan-Jones ed. (1997, p. 134) も「刈りとられた農作物という豊かなイメージで、束ねられた芒の白い (かつては緑だった) 麦を、墓へと運ばれる老人に喩える擬人的含意を伴っている」と述べ、“bier” の二重の意味、およびかつて収穫の儀式ではしばしば麦の刈り取りが老人を殺す儀式のように見なされたことに言及する。⁶ 7 行目 “summer's green” (夏の緑) については Wilson ed. (1966, p. 107) も *A Midsummer Night's Dream* 2 幕 1 場の “the green corn / Hath rotted ere his youth attained a beard” を参照せよと指示する (下線は筆者)。⁷ 8 行目 “bier” については Burrow ed. (2002, p. 404) も「荷車」という古義と「棺台」というより一般的な意味が組み合わさって収穫から弔いへとイメージ

⁴ Burrow ed. (2002, p. 404) は “breed” について「子孫という意味の名詞であるが、切実な命令法動詞の含みがある」 (“offspring. Breed is a noun, but there is just a hint of desperate imperative.”) との注釈をつけている。

⁵ “The pessimistic tendency which emerges in the expression just mentioned (lines 2 to 6) becomes still more apparent when harvest-home is transmuted into a funeral, and the waggon laden with ripened corn becomes a bier bearing the aged dead. Contrast with this, ‘Thou shalt come to [thy] grave in a full age, like as a shock of corn cometh in in his season,’ Job v. 26, A. V.” (Tyler 1890, p.169). (下線は筆者)

⁶ “summer's ... beard a richly inclusive image of crops which have been cut and harvested, with an implicit personification of the trussed-up and white-bearded corn (formerly green) as an old man being carried to his grave. Though a *bier* could be any kind of barrow or litter for carrying heavy goods, its strongest association was with the portage of dead bodies, as in Ophelia's “They bare him barefaced on the bier (*Ham* 4.5.177-8). In harvesting rituals, the cutting of the corn was often seen as the ritual slaughter of an old man, as in the folksong “John Barleycorn” ...” (Duncan-Jones ed. 1997, p. 134). (下線は筆者)

⁷ 【表 1】で 12 番の “green” を「穀物」と位置づけたのは上記の理由による。

が変容し、それは青年が子を生む可能性を自己愛へと変容させることに対応している、との解釈を示す。⁸ 13 行目で「時の翁の大鎌」(“Time’s scythe”) が明記されていることから、この詩には〈人〉を〈農作物〉として捉え、〈時〉はそれを刈り取るとするメタファー思考が反映されていることは明白である。言わば〈時は農夫、人は麦〉とでも言うべきメタファー思考である(〈時は農夫、人は麦〉のメタファーについては上記の言語文化レトリック研究会での発表の際に渡辺秀樹教授より示唆をいただいた)。

一方、【表 1】が示すように、*Sonnets* において青年の喩えとなる植物は花が多く、農作物(穀物)による喩えは 12 番 7-8 行目(引用(3)の下線部)以外見られない。詩人が〈時は農夫、人は麦〉というメタファー思考を顕在的に意識していることは 12 番の描写から明らかであるが、*Sonnets* 全体から推測すると、詩人の目から見た青年は、〈農作物〉と言うよりむしろ、その場限り美しく咲くだけの〈花〉なのではないだろうか。1-126 番まで全体にわたり、詩人は〈時〉の残虐な手から青年を守ろうとする意志を随所で熱心に表明しているが、そのための手段として青年に結婚して子を儲けることを勧めるという内容の詩は Marriage Sonnets のみであり、18 番以降はまるでその方法を諦めたかのように、結婚して子を儲けよとは一言も言わなくなる。⁹ 詩人の声に青年が耳を貸そうとせず、忠告の効き目がないことが、「なぜ君は自分だけのために美の遺産を浪費するのか」(“Unthrifty loveliness, why dost thou spend / Upon thyself thy beauty’s legacy?” (Sonnet 4, ll.1-2))、「意地を張るのをやめなさい」(“Be not self-willed,” (Sonnet 6, l. 13) といった表現からうかがえる。「君が独身のまま空しく人生を費やすのは、妻を寡婦にして泣かせまいとするためなのか?」(“Is it for fear to wet a widow’s eye / That thou consum’st thyself in single life?” (Sonnet 9, ll. 1-2)) という問いかけが示すように、青年は独身を保ちたがっているようである。「君が君自身への信仰から子孫を残すことへと改宗するなら、真と美はともに生き茂ることになるだろう」(“truth and beauty shall together thrive, / If from thyself to store thou wouldst convert;” (Sonnet 14, ll. 11-12)) という言葉からも、青年が子を儲けることよりも自分自身のことのみを考える人であることがわかる。この美しい青年は次の世代に命を「つなごうとしない」、つまり今の自分自身しか愛せない人間であることを、詩人は農作物を避けて花を主たる喩えとするという媒体の選び方によって、意図的に示そうとしているのではないかと考えられる。

2.2 青年を花に喩えるなら

【表 1】が示すように、126 番までのソネット群では、青年を植物に喩える表現としては花、とりわけ薔薇が顕著である。1 番で青年を描写する最初の喩えが「美の薔薇」(“beauty’s rose”) であること、また青年への愛情溢れる呼称として用いられている植物名は薔薇のみであること(“For nothing this wide universe I call, / Save thou, my rose; in it thou art my all.” (Sonnet 109, ll.13-14)) から、青年を表す主たる比喩は薔薇だと考えられそうである。ところが Harness ed. (2013) を参照した際、疑問が浮かんた。本書では 1 ページにつき 1 つずつのソネットが記され、各ページのソネット本文の下に Ian Penny による色刷りの挿絵が施されている。各ページの上部は同じ赤い薔薇の模様で統一されている。これは、本作品に登場する花の中で薔薇が最も多いことに呼応したもので、挿絵の自然な選択としてうなずける。疑問に思ったのは 3 番の詩が記されたページで、そこには下部に黄色の水仙が大きく描かれている。さらには、本書の扉ページにも、*The Sonnets* というタイトルと William Shakespeare という著者名との間に、3 番のページと同じ黄水仙の挿絵が挿入されている。しかし、3 番の詩本文には、さらに言えばこの *Sonnets* 全体を見渡しても、水仙は一切記述されていない。なぜ扉ページにまで、水仙が挿絵として選ばれているのだろうか。

3 番を詳細に観察すると、その謎は解ける。

⁸ “bier in earliest uses ‘A framework for carrying; a handbarrow; a litter, a stretcher’ (OED 1), with also the more usual sense of ‘The movable stand on which a corpse, whether in a coffin or not, is placed before burial’ (OED 2). The combination of senses turns harvest into funeral, as the friend turns opportunities for reproduction into self-love” (Burrow ed. 2002, p. 404). (下線は筆者)

⁹ 高松 (1986, p. 222) はソネット 18 番に付した注釈で『結婚ソネット』群が終り、このソネット以後は、詩人の青年に対する愛の表明があらわになる。詩人は青年の美貌を称えつつけるが、子孫を得て美を永遠のものとせよ、と説くことはもう二度とない。そのかわりに、詩人は自分の作品によって、若者の美を永遠に伝えるという決意を披歴する。」と述べている。

- (4) Look in thy glass and tell the face thou viewest
 Now is the time that face should form another,
 Whose fresh repair if now thou not renewest
 Thou dost beguile the world, unbless some mother.
 For where is she so fair whose unear'd womb
 Disdains the tillage of thy husbandry?
Or who is he so fond will be the tomb
Of his self-love to stop posterity?
 Thou art thy mother's glass, and she in thee
 Calls back the lovely April of her prime;
 So thou through windows of thine age shall see,
 Despite of wrinkles, this thy golden time.
 But if thou live rememb'red not to be,
 Die single, and thine image dies with thee. (Sonnet 3)

これは独身生活を謳歌する青年に、結婚して自らの顔を再生する（2行目）、すなわち子供を儲けることを勧める詩である。7行目の“fond”は「のぼせ上がった、愚かな」¹⁰ という意味で、7-8行目では「わが身を愛するあまり、子孫をのこすこともなくおのれを愛の墓にする、そんなおろかな男がいてもいいものか。」（高松雄一訳）と青年への諫言が記されている。この描写により、自分自身にうつつを抜かし、女性には目もくれない青年の性格が浮かび上がる。

この青年の自己愛（self-love（8行目））は、換言すれば“narcissism”である。Duncan-Jones ed. (1997, p. 116) は3番の内容を“The poet begins by reinforcing the young man's narcissism, but finds within it an argument for procreation.”と要約している（下線部は筆者）。“narcissism”はギリシャ神話のナルキッソス（Narcissus）の文化モデルに基づく概念である。¹¹ ナルキッソスはニンフのエコーらの求愛を退け、泉の水に映る自分の姿に恋焦がれて死に、水仙の花と化す美青年である（Smith (1884, p. 537) および Roman and Roman (2010, p. 337) 参照）。Harness ed. (2013) において扉ページおよび3番のページを飾る挿絵として水仙が選ばれたのは、「*Sonnets* に明示された青年の植物比喩媒体は主として薔薇であるが、明示されていない（すなわち隠された）媒体は自己愛の具現化としての水仙である」という考え方に基づいているのではないだろうか。

シェイクスピアは長編詩 *Venus and Adonis* で美少年とナルキッソスの取り合わせを描いている（*Venus and Adonis* と *Sonnets* の関連については渡辺秀樹教授より御教示をいただいた）。

- (5) ‘Is thine own heart to thine own face affected?
 Can thy right hand seize love upon thy left?
 Then woo thyself, be of thyself rejected:
 Steal thine own freedom, and complain on theft.
Narcissus so himself himself forsook,
And died to kiss his shadow in the brook.

 ‘Torches are made to light, jewels to wear,
 Dainties to taste, fresh beauty for the use,
 Herbs for their smell, and sappy plants to bear.
 Things growing to themselves are growth's abuse;
 Seeds spring from seeds, and beauty breedeth beauty:
 Thou wast begot: to get it is thy duty.

 ‘Upon the earth's increase why shouldst thou feed,

¹⁰ “**fond** infatuated, foolish, silly” (Burrow ed., 2002, p. 386). 他に “**fond** foolish, silly; but also fond = loving” (Duncan-Jones ed. 1997, p. 116) という注釈もある。

¹¹ *OED* では “narcissus” の語義 1 番として植物の「水仙」 (Any of numerous spring-flowering bulbous plants of the genus *Narcissus* (family Amaryllidaceae), native to Europe and the Mediterranean, which includes the daffodils; (also, in form *Narcissus*) the genus itself.) を、2 番として「ナルキッソス」および比喩的に「自己愛のきわめて強い人」 (*Greek Mythology*. (The name of) a beautiful youth who fell in love with his own reflection in water and pined to death. Hence (allusively): a person characterized by extreme self-admiration or vanity; a narcissist.) を示している。

Unless the earth with thy increase be fed?
 By law of nature thou art bound to breed,
 That thine may live, when thou thyself art dead:
And so in spite of death thou dost survive,
In that thy likeness still is left alive.' (Venus and Adonis, ll. 157-174)

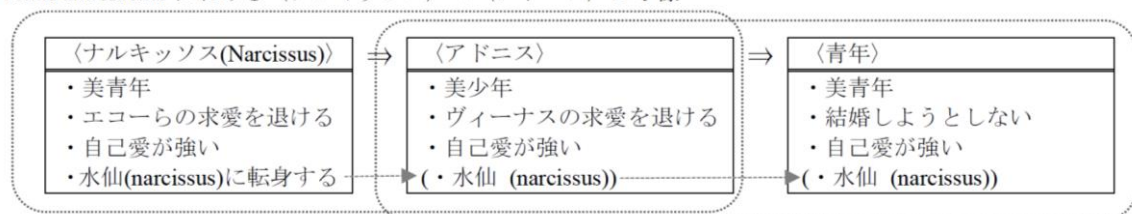
これは美少年アドニスに恋をしたヴィーナスが求愛を拒まれ、切々と思いのたけを訴える言葉の中の一節であるが、161 行目ではアドニスをナルキッソス (“Narcissus”) になぞらえている。Wilson ed. (1966) は *Venus and Adonis* の 163-174 行目の内容と The Marriage Sonnets との言葉選びの共通性について次のように指摘している。

In these opening sonnets, moreover, as often in his plays, Shakespeare did not hesitate to draw upon his own earlier writings. The same theme for example is treated in *Venus and Adonis*, ll. 163-74: ... The thought, sometimes the very words, are the same. (Wilson ed. 1966, pp.90-91)

この指摘に基づき、引用 (5) を *Sonnets* のテキストと比較してみると、166 行目の「濫用」を意味する “abuse” は Sonnet 4 の 5 行目にも動詞の形で用いられ (“Then, beauteous niggard, why dost thou abuse / The bounteous largess given thee to give?” (Sonnet 4, ll. 5-6)), 168 行目の「子を儲けることがあなたの務めだ」とする “to get it is thy duty” の “get”¹² は Sonnet 7 でも用いられている (“So thou, thyself outgoing in thy noon, / Unlooked on diest unless thou get a son.” (Sonnet 7, ll. 13-14)). 169 行目の “increase” は (2) に引用した Sonnet 1 の 2 行目で動詞として用いられ、171 行目の “breed” は (3) の Sonnet 12 の 14 行目で名詞の形で用いられている。さらに、173-174 行目 (「このように、死んでもあなたは生き続けるのだ、あなたの生き写しの姿が生きて残るのだから。」) は、Marriage Sonnets において詩人が青年に子を儲けるよう説く根拠と共通している (“But as the ripper should by time decease, / His tender heir might bear his memory:” (Sonnet 1, ll. 3-4), “Make thee another self for love of me, / That beauty still may live in thine or thee.” (Sonnet 10, ll. 13-14), “But were some child of yours alive that time, / You should live twice, in it, and in my rhyme.” (Sonnet 17, ll. 13-14) 参照)。

以上の観察から、Wilson ed. (1966, pp.90-91) が指摘する通り、(5) に引用したヴィーナスの主張は *Sonnets* の 1-17 番 (Marriage Sonnets) における詩人の主張と同じ趣旨である。ソネット 53 番には「アドニスを描いてごらん、その肖像画はあなたを下手になぞった模写にしかない」 (“Describe Adonis, and the counterfeit / Is poorly imitated after you.” (Sonnet 53, ll. 5-6)) と、青年とアドニスを明確に関連付ける描写が見られる。このことから、シェイクスピアが *Sonnets* における青年の人物造形にあたり、自らが著した *Venus and Adonis* でヴィーナスからナルキッソスになぞらえられた美少年アドニスを重ね合わせていることは明らかである。すなわち、*Sonnets* の美青年は、明示こそされていないが、〈ナルキッソス〉、ひいてはその転身後の姿である〈水仙〉のイメージをまとっている存在であり、Harness ed. (2013) における Ian Penny の水仙の挿絵は、〈青年〉の中に隠された〈水仙〉の概念要素を映し出したものと言える。【図 1】は、*Venus and Adonis* および *Sonnets* の 2 作品を通して、〈アドニス〉の領域を介して〈ナルキッソス〉から〈青年〉へと写像関係が成立し、ナルキッソスと同じ名が冠され “narcissism” と所縁のある〈水仙〉(narcissus) という概念要素が〈青年〉に転写される様を示したものである。

Venus and Adonis における 〈ナルキッソス〉⇒〈アドニス〉の写像



Sonnets における 〈アドニス〉⇒〈青年〉の写像

【図 1】 *Venus and Adonis* および *Sonnets* における 〈ナルキッソス〉〈アドニス〉〈青年〉の概念写像

¹² ここでの “get” は “beget” (男親が子を儲ける) の意味である (Burrow ed. 2002, p. 184 および OED “get” の語義 25 参照)。

なお、Penny の挿絵では水仙の花弁は黄色で描かれ、花心の副冠はラッパに似た形をしている。この花は daffodil (ラッパズイセン) と呼ばれ、スイセン属 (Narcissus) の一種である。花の象徴的意味すなわち花言葉を、神話、伝説および文学作品、特に詩での描かれ方を例にとって解説した Ingram (1887, pp. 251-253) では、narcissus の花言葉は「自己愛」(self-love)、daffodil の花言葉は「報われない愛」(unrequited love) と記され、daffodil については、多くの詩人から愛された美しい花であるが、冥界の王プルートー (Pluto) がプロセルピナ (Proserpine) を誘拐し冥界へ連れ去ったときに車からこの花が落ちたという逸話があることが示され、*Winter's Tale* の一節 “O Proserpina, / For the flowers now that, frightened, thou lett'st fall / From Dis's wagon: daffodils / That come before the swallow dares, and take / The winds of March with beauty.” が引用されている (p. 252)。Penny の水仙の描画は、*Sonnets* の青年が「自己愛」に取りつかれていることを表すとともに、いつか冥界へ連れ去られる、すなわち「死ぬ」運命にあること (Sonnet 3, l. 14 “Die single, and thine image dies with thee” 参照)、そして (後続ソネット群で青年の裏切りを嘆いたり不実をなじったりする詩が多発することからもわかる通り) 詩人の愛が「報われない」ことの暗示と考えることもできる。

3. 青年の自己愛と詩人の愛を表すレトリック

3.1 〈鏡〉のメトニミー

2.2 節で (4) に引用した 3 番のソネットでは、“self-love” (8 行目) の前後に “glass” という語が登場するのが興味深い。詩人は青年に鏡を見るよう勧め、鏡に映る自分の顔に「今こそこの顔がもう一つの顔を作る時だ」と告げよと促す (“Look in thy glass and tell the face thou viewest / Now is the time that face should form another;” (Sonnet 3, ll. 1-2))。さらに、青年のことを「君の母上の鏡」と述べ、青年の母が青年の姿から彼女自身の春の盛りの頃を思い出すのだと語る (“Thou art thy mother's glass, and she in thee / Calls back the lovely April of her prime;” (ibid. ll. 9-10))。

“glass” という語はナルキッソスが水面に映った自らの姿に見惚れたことを想起させる。ナルキッソスの像を映した水面は鏡の役割を果たしたのである。まるでナルキッソスの行動をなぞらせるかのように、3 番で詩人が青年に “Look in thy glass” と勧めるのはなぜなのか。

Garber (2021, pp. 106-109) は Sigmund Freud の、列車内の手洗いのドアの鏡に映った自身の姿を、鏡と知らずに他人の姿と見間違い、嫌悪感を覚えた (“I thoroughly disliked his appearance”) という経験談、さらに、精神分析療法は患者が鏡に映った自分の像に感じる恐怖感によって阻害されるとの Freud の叙述を紹介している。¹³

このことから、鏡は自己嫌悪を覚える人にとっては正視したくないものであることがわかる。逆に、自分のことが好きな人は (ナルキッソスが水鏡を見惚れたように) 鏡を見ることを好むとも言える。「鏡」は自己を愛するという行動において登場する必須アイテムである。その意味で、〈鏡〉の概念は〈自己愛〉を表すメトニミーであると言える。

(2) で引用した 1 番のソネットでは、鏡は明示されはしないが、鏡を連想させる表現が 5 行目にある。(2) では冒頭 4 行のみ引用したが、以下に全文を引用する。

(6) From fairest creatures we desire increase,
That thereby beauty's rose might never die,
But as the ripper should by time decease,
His tender heir might bear his memory:
But thou, contracted to thine own bright eyes,
Feed'st thy light's flame with self-substantial fuel,
Making a famine where abundance lies,
Thy self thy foe, to thy sweet self too cruel.
Thou that art now the world's fresh ornament,
And only herald to the gaudy spring,
Within thine own bud buriest thy content,
And, tender churl, mak'st waste in niggarding:
Pity the world, or else this glutton be,
To eat the world's due, by the grave and thee. (Sonnet 1)

¹³ Garber (2021) のこの記述については渡辺秀樹教授から御教示いただいた。

5 行目以降は青年が結婚を考えもせず独身生活を謳歌するのを戒める内容で、5 行目では、青年が（女性とではなく）自分自身の輝く目と婚約した（“contracted to thine own bright eyes”）と述べる。高松（1986, p. 216）は「ギリシア神話のナルキッソスのごとく、我とわが姿に見惚れているがゆえに。」という注釈を付けている。6 行目については Burrow ed. (2002, p. 382) が Ovid の *Metamorphoses* における Narcissus からの引喩を指摘する。¹⁴ 青年がまるでナルキッソスのように鏡に映る自らの美しい目に見入っている様子が、5 行目の描写から想像できる。

このように鏡に映る自らの顔にうっとりする青年であれば、3 番のソネット 1 行目の青年への「鏡を見よ」（“Look in thy glass”）という呼びかけは、おそらく容易に受け入れられるであろう。詩人は自己愛と親和性の強い「鏡」というアイテムを用いて、9 行目の「君は母の鏡」（“Thou art thy mother’s glass,”）という比喩表現につなげ、実体と鏡像が 2 世代にまたがる、すなわち自分の次の世代（子供）が自分の鏡像として見える可能性を示すことにより、鏡を通してただ自分自身を見るだけではなく次の世代に思いを致すよう促し、青年の美が次世代に受け継がれて〈時〉を越えて残るという詩人の願望を実現しようとしているのである。

3.2 鏡が映し出すもの

詩人が認識する鏡の役割は、自己愛の強い人にその人自身の姿を見せてうっとりさせることだけではない。鏡は時に目にしたくない現実をも映し出し突きつけるものでもある。22 番では鏡は若く美しい青年ではなく、年齢を重ねた詩人自身の姿を映し出す。

- (7) My glass shall not persuade me I am old,
 So long as youth and thou are of one date,
 But when in thee time’s furrows I behold,
 Then look I death my days should expiate. (Sonnet 22, ll. 1-4)

詩人の鏡（“My glass”）が映す像は詩人が老いた（“I am old”）ことを示すが、青年を愛する詩人は、青年の若々しさに心強さを得て、その実態を認めようとししない。ただし、青年の顔に皺（“furrows”）を見るときが来れば、自分の人生が終わることを意識するだろう、と述べる。

また、(8) に引用する 62 番では、(4) に引用した 3 番と同様、“glass”（鏡）と “self-love”（自己愛）の共起が見られるが、¹⁵ ここでは自己愛の罪を負っているのは詩人自身で（1-2 行目）、8 行目までは自分の顔も姿も人格も他の追従を許さず、自分の価値はこの上ないと自負する。ところが 9 行目以降で、鏡（“my glass”）が映し出すのは詩人の真実の姿、老いて日焼けし打ちのめされひび割れた（“Beated and chapped with tanned antiquity”）顔である。これを見て、詩人は自分と青年を同一視して自分のつもりで青年を賛美していたのだと悟る（13-14 行目）。

- (8) Sin of self-love possesseth all mine eye,
 And all my soul, and all my every part;
 And for this sin there is no remedy,
 It is so grounded inward in my heart.
 Methinks no face so gracious is as mine,
 No shape so true, no truth of such account,
 And for myself mine own worth do define
 As I all other in all worths surmount.
 But when my glass shows me myself indeed,
Beated and chapped with tanned antiquity,
 Mine own self-love quite contrary I read;
 Self so self-loving were iniquity:
 ’Tis thee (my self) that for myself I praise,

¹⁴ “The friend is accused of burning up the substance of his own life in an echo of Ovid’s Narcissus, ‘uror amore mel: flammis moveoque feroque’ (‘I am burned by love of myself: I produce and am consumed by flames’, *Met.* 3.464).” Burrow ed. (2002, p. 382).

¹⁵ Harness ed. (2013) における 62 番のページには、3 番よりも少し小ぶりの黄水仙が描かれている。62 番の詩本文にも水仙の描写はないが、“Sin of self-love” という語句から始まり、「自己愛の罪」に着目した詩であるから、水仙の挿絵は当然の配置と言える。

Painting my age with beauty of thy days. (Sonnet 62)

さらに 77 番では、鏡がゆくゆくは青年の老いた姿さえも映し出すことを予言する。

(9) Thy glass will show thee how thy beauties wear,

Thy dial how thy precious minutes waste,

The vacant leaves thy mind's imprint will bear,

And of this book this learning mayst thou taste:

The wrinkles which thy glass will truly show

Of mouthèd graves will give thee memory;

Thou by thy dial's shady stealth mayst know

Time's thievish progress to eternity. (Sonnet 77, ll. 1-8)

ここで青年が覗き込む鏡(“Thy glass”)が映し出すものは、青年の美しさが衰えてゆき(1行目)、皺が刻まれ(5行目)、死が近づく(6行目)という、容赦のない時の流れである。鏡は自己愛と親和性が強く、愛する対象である自分自身を見たいと思う願望を叶え、自分の姿を明瞭に映し出してくれるが、自己愛の強い者の目に心地よい幻覚を見せてくれるものでは決してない。人間の実態を映し出し、人間が〈時〉の威力に対して脆弱な存在であることを赤裸々に見せつけるものでもある。¹⁶ この鏡の機能を利用して、詩人は *Sonnets* を通して青年に鏡を覗き込ませ、〈時〉に立ち向かい青年の美を守る手立てを模索する必要性を主張しようとしているのではないだろうか。

3.3 文法形式に隠された〈鏡〉のレトリック

2.2 節で (5) に引用した *Venus and Adonis* 166-168 行目で、ヴィーナスはアドニスに「ただ自らのために成長するものは成長の濫用だ。種は種から生まれ、美は美を生み出すのだ。あなたは生み出されたのだから、生み出すことがあなたの務めだ」(“Things growing to themselves are growth's abuse; / Seeds spring from seeds, and beauty breedeth beauty: / Thou wast begot: to get it is thy duty.”) と説く。166 行目の “to themselves” に対し、Burrow ed. (2002, p. 184) は “A similar enclosed reflexive form is used also to condemn the self-love of the friend in Sonnet 94. 10.” (下線は筆者) という注釈を付けている。この “enclosed reflexive form” (閉じられた再帰形) とは、再帰代名詞の用法の中でも強調のように単に先行する(代)名詞と同一指示というだけではなく、文中の主語が指す主体が行う動作の及ぼす作用が他者に向くのではなく自分自身に向くことを表す、すなわち作用が自分から発せられて自分に帰る(すなわち「閉じられる」)ことを表すような再帰形という意味だと考えられる。上記の例で言えば、成長という動作が、それによって種を残すでもなく、自分と同じ美しさをもつ次世代を生み出すわけでもなく、単に自身を目的として自身に帰結するという閉じられた作用であることを、“to themselves” という再帰代名詞が表しているのである。Burrow ed. (2002, p. 184) が言及したソネット 94 番の 10 行目には「類似の再帰形」として “to itself” が見られる。

(10) The summer's flower is to the summer sweet,

Though to itself it only live and die, (Sonnet 94, ll. 9-10)

この 9-10 行目に対し、高松 (1986, p. 131) は「夏の花は、たとえ、種を結ばずにひっそりと枯れていくにしろ、夏にあまい香りをまきちらす。」という訳を、大場 (編注訳 2018, p. 207) は「夏の花は、ただ己れの美しさのためにひとり咲き死んでいくだけだが、夏のその季節にとってなんとかぐわしい存在であることか、」という訳を付けている (いずれも下線は筆者)。夏の花が生きて死ぬという行動がただ自分のみに向いた閉じられた行動であることが、この再帰形によって表されていることがわかる。まるで水鏡に映った自分の姿に向き合うように、花が自分のみに向き合い自分だけを思って行動することを表す表現である。

¹⁶ ありのままの実態を映し出すという鏡の機能についてのシェイクスピアの認識は、*Hamlet* 3 幕 2 場でハムレットが旅回りの役者に演技指導をする場面で、演劇の役割を鏡に喩えて時代の実態を映し出すものと主張する表現 (“the purpose of playing, / whose end, both at the first and now, was and is, to hold, as / 'twere, the mirror up to nature; to show Virtue her own feature, / scorn her own image, and the very age and body of the time his / form and pressure.” (cf. Edwards, ed. 2019)) の中にも表れている (*Hamlet* におけるハムレットと臣下とのやりとりに見られる鏡面反射のような繰り返しについては、本プロジェクト報告書の渡辺秀樹教授の論文を参照されたい)。

そうすると、この「閉じられた再帰形」(enclosed reflexive form)の使用は、文法形式を利用して詩の中に〈鏡像〉(reflection)を作り出す隠された工夫だと言えるのではないか。さらに、3.1 節で確認したとおり、(6)に引用した1番では、5行目“contracted to thine own bright eyes”が鏡を連想させ、6行目は Ovid の *Metamorphoses* に描かれた Narcissus からの引喩であるが、さらに6行目および8行目には再帰形が見られる。以下に5-8行目を再度引用する。

- (11) But thou, contracted to thine own bright eyes,
Feed'st thy light's flame with self-substantial fuel,
Making a famine where abundance lies,
Thy self thy foe, to thy sweet self too cruel. (Sonnet 1, ll. 5-8)

6行目に示された「自分自身を燃料として」(“with self-substantial fuel”)自分の輝く炎をかき立てる行為、¹⁷ 8行目の「自らを自らの敵に回す」(“Thy self thy foe”)という「美しい自身への」(“to thy sweet self”)残酷な行為は、自分の姿を鏡に映した結果その像が自分の目に映るかの如く、その自分の行為の結果が自分に帰ってくるという性質を備えている。これらの再帰表現の頻出からは、鏡の反射のイメージを重ねようとする隠された詩人の意図がうかがえる。

野島(1988)¹⁸は *Hamlet* の構造を「鏡の迷宮」と捉え、さまざまな主題(父と子、叔父と甥、復讐、毒など)が「合わせ鏡の鏡像のようにこだまし反復し合っている」と述べるが、登場人物たちが互いに陰謀を企み、自分で仕掛けた罠にはまる、つまり「すべての企みが仕掛けた当人にはね返ってくる」様を「企みの行為の再帰動詞、企みの行為者の再帰代名詞」に喩え、「これはまさしく鏡(リフレクター)のイメージ」だと論じる(p. 23)。野島が論じた *Hamlet* のプロット内の鏡面反射が、上記ソネットでは文字通り再帰形によって表されているのである。

次の13番では、再帰代名詞をbe動詞の補語とする表現が1行目と6-7行目に見られる。

- (12) O that you were yourself; but, love, you are
No longer yours than you yourself here live.
Against this coming end you should prepare,
And your sweet semblance to some other give.
So should that beauty which you hold in lease
Find no determination; then you were
Yourself again after your self's decease,
When your sweet issue your sweet form should bear.
Who lets so fair a house fall to decay,
Which husbandry in honour might uphold
Against the stormy gusts of winter's day
And barren rage of death's eternal cold?
O none but unthrifths, dear my love, you know:
You had a father, let your son say so. (Sonnet 13)

詩人は「あなたが(いつまでも)あなたのままであったなら」(1行目)という願望は叶えられないこと、やがて来る人生の終わりに備え、青年の美しい似姿(すなわち子供)を誰かに与えるべきであることを述べ(2-4行目)、そうすれば死後も「あなたがあなたのままでいられる」と述べる(6-7行目)。2箇所“you were yourself”は主語と補語の指示対象が同一で、これも主体と鏡像の関係を文法形式で表現したものと言える。青年が子孫を残すことによって〈時〉との戦い(11-12行目“Against the stormy gusts of winter's day / And barren rage of death's eternal cold”)に勝つことができ、美しい鏡像が(青年に生き写しの子供という形で)保たれるのだということを、“you were yourself”の繰り返しによって強調しているのである。

この詩に表され、また *Marriage Sonnets* に共通する、子孫を残させることで〈時〉と戦おうという詩人の主張は、18番以降は影を潜め、詩人は自分が不滅の詩を作り、その詩の中で青年を永遠

¹⁷ Duncan-Jones ed. (1997, p. 112) はこの6行目に描写された行為を「まるで蠟燭のよう」だと指摘している (“Like a candle, the young man sustains his beauty (flame) with fuel made from his own body (substance) ...”).

¹⁸ 野島(1988)の論考の存在は渡辺秀樹教授から御教示いただいた。

に生かそうと戦法を変える（注 9 で言及した高松（1986, p. 222）参照）。この戦法、および自分の詩の価値の高さへの自負を、詩人は複数の詩にわたって繰り返し提示する（次節参照）。(13) に引用する 84 番でも、自分ほど青年を的確に称賛できる詩人は他にはいないという自信を披歴する。詩人が考える、青年へのこの上ない称賛の言葉は 2 行目の「あなただけがあなただ」(“you alone are you”) であり、8 行目でも同様に、「あなたはあなただ」(“you are you”) と言えばそれで青年への立派な称賛になるのだと述べる。主語と be 動詞の補語を同一語とするこれらの同語反復表現（トートロジー）も、(12) の “you were yourself” と同様、主体と鏡像の関係の文法形式上での再現であり、ここにも〈鏡〉のレトリックが隠されている。

- (13) Who is it that says most, which can say more
 Than this rich praise: that you alone are you,
 In whose confine immurèd is the store
 Which should example where your equal grew?
 Lean penury within that pen doth dwell,
 That to his subject lends not some small glory,
 But he that writes of you, if he can tell
 That you are you, so dignifies his story.
 Let him but copy what in you is writ,
 Not making worse what nature made so clear,
 And such a counterpart shall fame his wit,
 Making his style admired everywhere.
 You to your beauteous blessings add a curse,
 Being fond on praise, which makes your praises worse. (Sonnet 84)

4. 〈鏡〉となり〈こだま〉となる詩人の愛

上述の通り、結婚して子供という〈鏡像〉を作れという詩人の忠告を聞こうとしない青年に対し、詩人は〈時の翁〉との戦いに勝利するため、自分の詩の中で青年を永遠に生かそうと作戦を変更する。この詩人の決意は *Sonnets* の中で以下のように繰り返し表現される。

- (14) So long as men can breathe or eyes can see,
 So long lives this [= eternal lines (l. 12)], and this gives life to thee. (Sonnet 18, ll. 13-14)
 (15) Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong,
 My love shall in my verse ever live young. (Sonnet 19, ll. 13-14)
 (16) And so of you, beauteous and lovely youth:
 When that shall vade, my verse distills your truth. (Sonnet 54, ll. 13-14)
 (17) So, till the judgement that yourself arise,
 You live in this [= this pow'rful rhyme (l. 2)], and dwell in lovers' eyes. (Sonnet 55, ll. 13-14)
 (18) And yet to times in hope my verse shall stand,
 Praising thy worth, despite his [= Time (l. 8)] cruel hand. (Sonnet 60, ll. 13-14)
 (19) His beauty shall in these black lines be seen,
 And they shall live, and he in them, still green. (Sonnet 63, ll. 13-14)
 (20) You still shall live (such virtue hath my pen)
 Where breath most breathes, even in the mouths of men. (Sonnet 81, ll. 13-14)

(14) から (20) は一貫して、詩人自らが作る詩は永遠に残る価値あるもので、(たとえ青年の命は尽きても) 詩の中で青年の若々しい美しさは保たれ生き続けるという同じ内容の宣言である。詩人は随所で、自分がいつも同じ内容を繰り返し詩に書いていることを自覚している。105 番では「私の歌も賛辞もいずれ変わらず、一人に向けられ、一人のことを、いつも同じように語り続ける」(“Since all alike my songs and praises be / To one, of one, still such, and ever so.” (Sonnet 105, ll. 3-4)) と述べ、76 番では「わかってほしい、愛する人よ、私はいつもあなたを書く。あなたのこと、愛のことがいつも私の主題なのだ」(“O know, sweet love, I always write of you, / And you and love are still my argument;” (Sonnet 76, ll. 9-10)) と訴えかけ、108 番では以下の (21) のように、これまで自分の真心を語り尽くしてきた、これ以上自分の愛を、君の美点を、新たに語ることがあろうか、いや何もないのだ、まるで神への祈りのように、「毎日まったく同じ言葉を繰り返す他ないのだ」

(6 行目) と語る。これらの言葉を実証するのが (14) から (20) の同一内容の繰り返しである。自分の詩の中で青年が永遠に生き続けると唱えるこれらの繰り返しは、確かに切実なる神への祈り (108 番 5 行目 “prayers divine”) の様相を呈している。

- (21) What's in the brain that ink may character,
Which hath not figured to thee my true spirit?
What's new to speak, what now to register,
That may express my love, or thy dear merit?
Nothing, sweet boy; but yet, like prayers divine,
I must each day say o'er the very same,
Counting no old thing old, thou mine, I thine,
Even as when first I hallowed thy fair name. (Sonnet 108, ll. 1-8)

青年を称賛するという詩人の一貫した姿勢において注目すべきは、詩の中に青年の美しさを「そのまま映し取ろう」とする態度である。(13) に引用した 84 番から語を借りれば、青年の “copy” (9 行目) を作り “counterpart” (11 行目) としようとする態度である。詩人は 82 番では「真に美しい者よ、君は、この真実を語る友の真実で平明なことばによってこそ、真実そのままに描かれるのだ」 (“Thou, truly fair, wert truly sympathized / In true, plain words, by thy true-telling friend.” (Sonnet 82, ll. 11-12)) と述べる。“thy true-telling friend” とは詩人自身を指し、OED によると “sympathize” は “To represent or express by something corresponding or fitting; to apprehend mentally by the analogy of something else. *Obsolete.*” (OED “sympathize” [†]3. [†]b. 下線は筆者) と定義され、82 番のこの箇所が用例に挙げられている。美しい青年の真実そのままに一致する (correspond, fit) 言葉を用いて青年の真の姿を詩の中に描き出しているのだという詩人の自負が、“truly” “true” “true-telling” という修辭的な繰り返しにより強調されている。¹⁹ ここには、〈詩そのものを鏡と見なす〉というレトリックが隠されていると言えよう。詩人は自らの詩という〈鏡〉の中に、青年のありのままの姿を映す〈鏡像〉を作ろうとしているのである。

この考察に対し、渡辺秀樹教授より「ここに mirror/glass のもう一つの比喩義『模範』の意味をも見るならば『自分の Sonnets154 編が英詩の鑑になるであろう』と言う自負までも読み取りたいのは沙翁最良と言ふべきか」というコメントをいただいた。Ophelia が悲痛な独白で Hamlet を語る言葉「流行の鑑、礼儀の手本」 (“The glass of fashion and the mould of form” (Hamlet III. i. 174)) における “glass” の意味である。感謝とともにここに紹介したい。自らの詩を〈青年を映す鏡〉であると同時に〈英詩の鑑〉だと見なす詩人の矜持は、確かに引用 (14) から (20) にも、また「(自分の詩に著した) あなたへの賛辞は後世代々あらゆる人々の目に留まりこの世の終末まで生き続けるだろう」 (“your praise shall still find room, / Even in the eyes of all posterity / That wear this world out to the ending doom.” (Sonnet 55, ll. 10-12)) という断言にも表れている。

同時に、上で観察した、詩人が同じ内容を繰り返し歌い続ける様子は、ナルキッソスに恋をした精霊エコーを思い起こさせる。ヘリコーン山のニンフであるエコーは女神ヘラの罰を受け、自ら主体的には何も言えず、他人の言葉を繰り返すことしかできなくなる。エコーの恋心はナルキッソスから退けられ、エコーは悲しみのあまりやせ衰え、最後には声だけが残し、こだまとなる (Smith (1884, p. 275) および Roman and Roman (2010, p. 141) 参照)。

126 篇もの詩をしたためて青年への思いを歌い上げる詩人の雄弁さは、主体的にものを言うことができず他人の言葉を繰り返すだけのエコーとは一見、似ても似つかない。ではなぜ、Sonnets を読むたびにエコーが連想されるのか。そのヒントは 78 番にある。

- (22) So oft have I invoked thee for my Muse
And found such fair assistance in my verse
As every alien pen hath got my use,
And under thee their poesy disperse.
Thine eyes, that taught the dumb on high to sing,
And heavy ignorance aloft to fly,

¹⁹ 大場 (編注訳 2018, p. 181) はこの箇所についての注釈で “truly, true, true-telling (alliteration) の polyptoton は art of rhetoric の最たるもの。” と述べている。

Have added feathers to the learned's wing,
 And given grace a double majesty.
 Yet be most proud of that which I compile,
Whose influence is thine, and born of thee.
 In others' works thou dost but mend the style,
 And arts with thy sweet graces graced be;
 But thou art all my art, and dost advance
 As high as learning my rude ignorance. (Sonnet 78)

詩人は幾度となく青年を詩神（ミューズ）として祈りを捧げて詩作を支えてもらい（1-2 行目）、青年の目は「ものを言えない」（“dumb”）詩人に高らかに歌うすべを教えてくれた（5 行目）、詩人が書いた詩のもつ力は青年から生み出されたもので（10 行目）、青年こそが詩人の芸術のすべてだ（13 行目）と述べる。詩に具現化された靈感はすべて青年に帰するものであり、自力ではものを言えない詩人が青年の力を借りて歌っているにすぎないのだという趣旨である。もちろん、青年を賛美したいあまりに自身を誇張して卑下するものではあるが、詩人自身の表現能力について、また詩人の詩作のインスピレーションをかき立てるといふ青年が果たしてきた役割についてのこの捉え方は、エコーの発話能力、エコーの恋情をかき立てるナルキッソスの存在を容易に連想させるものと言える。Sonnets には詩人自らをエコーに明示的に喩える表現は見当たらないが、言わば「隠れ媒体」として詩の中にエコーを潜ませ、青年と詩人の関係性をナルキッソスとエコーの関係性の観点から描こうとしているのだと考えられる。

鏡像もこだまも、ともに reflection である。詩人は自ら、ナルキッソスの神話における泉、あるいはエコーとなって、青年の真実を詩の中に鏡のように映し出し（reflect）、青年の真実をこだまのように反響させ（reflect）繰り返していると言える。〈ナルキッソス〉と〈青年〉の間、〈泉〉・〈エコー〉と〈詩人〉の間には【図2】のようなメタファー的対応関係が成立している。図の上半分は明示的な写像、網掛けをした下半分は隠された写像を表している。〈ナルキッソス〉と〈青年〉の対応関係は、【図1】で示したように〈アドニス〉を介して明確になり、〈ナルキッソスが自分の鏡像に見惚れる〉様子に対応する青年の〈鏡に映る自分の目に見惚れる〉様子は（6）に引用した1番のソネットに明示されている。それに対し、〈泉〉・〈エコー〉と〈詩人〉、〈鏡像〉・〈こだま〉と〈詩における青年の描写〉を結ぶ対応関係は、ソネット群の様々な箇所がちりばめられたヒントから推測できる隠されたレトリックと言える。

根源領域 〈ナルキッソスの神話〉		目標領域 〈青年への愛を歌う詩群〉
・水仙の前身ナルキッソス ・ナルキッソスが水に映る自身に見惚れる（＝〈自己愛〉を表すメトニミー）	⇒	・青年 ・青年が鏡に映る自身に見惚れる（＝〈自己愛〉を表すメトニミー）
・泉 ・水鏡 ・水鏡に映る鏡像 ・精霊エコー ・エコーが発するこだま ・エコーがナルキッソスを愛する		・詩人 ・詩人の詩 ・詩における青年の描写 ・詩人 ・詩のことばの繰り返し ・詩人が青年を愛する

【図2】 青年への愛を歌う詩群をナルキッソスの神話から理解するメタファー

5. おわりに

本研究ではシェイクスピアの Sonnets を対象とし、〈人間は植物である〉というメタファーの観点から詩人が〈時の翁〉の鎌に刈られる存在としての青年を「ただ自らのためにだけ咲き、死にゆく」（“to itself it only live and die” (Sonnet 94, l. 10)）〈花〉に喩え、ギリシャ神話に基づく文化モデルにおいて〈ナルキッソス〉と〈水仙〉が強い結びつきを有することから、自己愛の強い青年を表す隠された比喩媒体として〈水仙〉(narcissus) を選んでいると考えられること、また、ナルキッソスの自己愛を象徴する〈水鏡〉に対応する〈鏡〉のレトリックが、ソネット詩群の中に明示され、あるいは文法形式や詩人の詩作態度の中に隠されていることを論じた。さらには、詩人が同じ内容をソネット詩群の中に繰り返すという表現手法に、ナルキッソスを愛する〈エコー〉のレトリックが隠されていることも併せて論じた。

詩人が詩の中に青年の姿を映し出し、青年への愛の歌を繰り返すのは、〈ナルキッソス〉のごとく自己愛の強い青年に詩という〈鏡〉を提示し、あるいは〈こだま〉を響かせて、青年の関心を詩人の方へ向けたいからであり（“O learn to read what silent love hath writ:” (Sonnet 23, l. 13) 参照）、同時に〈時の翁〉の鎌から〈水仙〉のごとくか弱い青年を守り、その美を永遠に残したいからでもある。そこには詩人の青年へのひたむきな愛、切実な祈りがうかがえる。

参考文献

- Burrow, Colin, ed. (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.
- Duncan-Jones, Katherine, ed. (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Edwards, Philip, ed. (2019) *Hamlet, Prince of Denmark*. Third edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Garber, Marjorie (2021) “As 'Twere; or, Misrecognition,” *Raritan*, 41.1. 96-120. Rutgers University.
- Harness, Peter, ed. (2013) *The Sonnets* (Collector's Library). London: CRW Publishing Ltd.
- Ingram, John (1887) *The Language of Flowers*. London: Frederick Warne.
- 川西進 (編注) (1971) *Shakespeare's Sonnets*. 東京：鶴見書店。
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 嶺卓二 (編注) (1974) *Sonnets by William Shakespeare*. 東京：研究社。
- 野島秀勝 (1988) 「ハムレットの鏡」 笹山隆編『ハムレット読本』3-26. 東京：岩波書店。
- 大場建治 (編注訳) (2018) 『ソネット詩集』(研究社シェイクスピア全集別巻) 東京：研究社。
- 大森文子 (2018a) 「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
- (2018b) 「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1』(鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京：ひつじ書房、175-104.
- (2021) 「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.
- (2022) 「時のメタファーとシェイクスピア」『英語のレトリック・日本語のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2021)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、17-29.
- パノフスキー、エルヴィン (著)、浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏 (訳) (2002) 『イコノロジー研究』(上) 東京：筑摩書房。
- Roman, Luke and Monica Roman (2010) *Encyclopedia of Greek and Roman Mythology*. New York: Facts On File.
- Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* Vols. I and II. New York: Dover Publications.
- Schoenfeldt, Michael, ed. (2007) *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. MA: Blackwell.
- Smith, William (1884) *A New Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology and Geography*. New York: Harper and Brothers.
- 高松雄一 訳 (1986) 『ソネット集 (シェイクスピア作)』(岩波文庫) 東京：岩波書店。
- Tyler, Thomas, ed. (1890) *Shakespeare's Sonnets*. London: David Nutt.
- 渡辺秀樹 (2019) 「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション (言語文化共同研究プロジェクト 2018)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.
- (2021) 「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~”の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.
- (2022) 「Shakespeare における時の擬人化のヴァリエーション：英国 16~17 世紀詞華集を基礎資料にした Time の epithets と apostrophes 再考」『英語のレトリック・日本語のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2021)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、3-15.
- Wilson, John Dover, ed. (1966) *The Sonnets (The New Shakespeare)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』2003. 新潮社。
- OpenSourceShakespeare, George Mason University, 2003-2023. (<https://www.opensourceshakespeare.org/>)
- The Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press, 2023. (<https://www.oed.com/>)